

房総の文化財



埋まっていた状態の小銅鐸

木更津では初の「小銅鐸」発見！

木更津市大久保字中越あざ なかごしの「中越遺跡」で小銅鐸が発見されました。

青銅製で釣り鐘型をしており、高さ6.4cm、最大幅が3.6cmと非常に小さいものです。中は空洞、横断面の形は両端とがの尖った楕円形です。古墳時代前期(1,600年くらい前)の竪穴住居跡から発見されました。一部が破損してはいるものの、ほぼ完全な形をとどめており、千葉県内では8個目という大変貴重な発見で、

発掘調査現場には驚きと感動が広がりました。

8個の内訳うちわけは、市原市5個、袖ヶ浦市1個、君津市1個、木更津市1個です。いずれも昔の上総国かずさのくにの中で、しかも内房地域うちぼうに限られているのは大変興味深いことです。

祭りの道具か楽器ではないかと考えられていますが、県内の例では地域の有力者のお墓ふくそうに副葬された例が多いようです。

(土屋〈治〉)

財団法人千葉県文化財センター

20周年記念出土遺物展

平成6年11月12日から11月20日まで成田市中央公民館を会場として、当センターが県内各地で20年間にわたり行ってきた発掘調査の成果を公開する20周年記念出土遺物展「掘り起こされた房総の歴史」が開催され、期間中の見学者は延べ1,800名あまりにのぼりました。

貴重な遺物が一堂に集められ、見学者の方はふだん身近で見る機会の少ない遺物をまのあたりにし、目を見張っていました。また会場では体験コーナーと成田コーナーが特設され、体験コーナーでは縄文土器の文様を実際

テーマ展示



につけてみる事ができ、成田コーナーでは成田ニュータウンと成田空港の調査で見つかった遺跡の紹介が行われました。事業紹介のビデオも上映され、多くの人に興味をもって見てもらうことができ、センターの活動への理解を深めていただけたと思います。

その後、会場を松戸市立博物館に移し、12月3日から12月20日まで、展示しました。また、引き続き平成7年1月14日から2月19日まで、県立房総風土記の丘資料館でも展示する予定です。(宮)

創立20周年記念事業特集



新たな発展を期して—創立20周年記念式典—

財団法人千葉県文化財センターは、千葉県の急激な発展による各種公共事業が計画されるなかで、これらの開発事業と埋蔵文化財保護の調和を図るため、昭和49年11月1日に設立されました。

以来、県民みなさまの事業への御理解により、調査事業のみならず、各種の文化財保護活動のなかで、考古学的な成果もあげてまいりました。

このセンター創立20周年を祝う記念式典が平成6年11月10日(木)に千葉市「ちば共済会館」で行われました。

冒頭、奥山理事長は、センターのこれまで果たした役割を紹介し、「心の豊かさが求められる今、開発と文化財保護との調和を図り、過去を未来につなぐセンターの仕事は、益々

その重要性を増すものとなる。」とあいさつをしました。

式典には、千葉県、県教育庁を初めとして240名を超える来賓、関係者が出席し、これまでの活動を振り返りながら、今後も「学術的にも高い調査事業」、「積極的な普及事業」などを期待する言葉が寄せられました。



この場をお借りして、これまでのお礼を申し上げますとともに、なお一層の御支援をお願いいたします。(柄崎)

遺跡見学会

新川を望む古墳群

千葉県文化財センターの広報誌取材班は、八千代市間見穴遺跡において、このたび1,450年の眠りからさめた、古墳時代の豪族Mさんの単独インタビューに成功しました。以下、その模様をお伝えいたします。

—いかがですか、今の御気分は？—

M 「うーん、狭い石組みの棺の中に眠っているのも退屈してたので、なかなかだよ。」
—発掘調査によって、長い眠りをさまされたのですが……？—

M 「盗掘とは違って、我々のことも大事に扱ってくれるし、いろんな事をちゃんと調べた後も、暗い部屋にきちんと保管してくれれば、そんなにいやな気持ちじゃないよ。」

—たくさんの方があなたの古墳を見学してきましたが……？—

M 「いやー！あれは、ちょっとびっくりしたが、わしのお墓の事を、わかりやすく紹介してくれたので、ちょっぴり誇らしく思えるようになっただ。」

—最後に、私たちのために、お墓のことや当時の事を教えてください—

M 「あなた達が、そのころの事を、少しずつ調べているんだらあ！残念だけど、これ以上は話せないなあ！ちゃんとした調査をして、わたしたちの暮らしぶりを、しっかり歴史にとどめ、多くの人々の未来の参考にしてくれたまえ。」

以上、八千代市間見穴遺跡で開催した調査発表会の翌日に見た夢のひとこまでした。

(田形)

富津市川島遺跡



11月19(土)、夜半からの雷雨も上がり、晩秋の割には汗ばむような中で、富津市西大和田の川島遺跡見学会が行われました。幅20mほどの細長い調査区ながら、弥生時代の竪穴住居跡・方形周溝墓、古墳時代の古墳、奈良・平安時代の竪穴住居跡等が高い密度で検出されていて、弥生時代の土器・石斧類や、奈良時代の鍛冶(鉄製品の製作)に関連する



遺物も多く出土しています。

遺跡は、中世の14世紀以降に大量の砂に埋まり、生活の跡が最近まで途絶えてしまいましたが、弥生時代から平安時代までは重要な拠点として利用されていました。見学会での職員のユーモアあふれる奥行き深い説明に、約180名の参加者は海辺の遺跡の有りし日の姿を思い描いていたようです。(加藤)

ウォーク・イン古代—山武町・成東町の遺跡を歩く—

山武町、成東町を流れ九十九里浜に流れ込む境川中流域の台地は、県内有数の古墳群が途切れることなく存在している地域です。その古墳群のなかで発掘調査を進めている胡摩手台16号墳、久保谷遺跡の遺跡説明会と併せて、周辺に残されている古墳群などを歩いて廻ろうという企画を立てました。

平成6年10月30日(日)は、前日の雨もあがり、薄日のさすハイキング日和で、地元の考古学愛好者や小学生60名が参加しました。

古墳群にさしかかると参加者は、道路脇の杉林のなかによく原形をとどめた前方後円墳を見つけ、さっそく散策を開始しました。そのなかでひととき大きな胡摩手台16号墳では二重に巡る周溝の規模や横穴式石室の検出状況に驚き、担当者の説明に熱心に聞きいってました。また、久保谷遺跡では、古墳時代の竪穴住居跡の一つに復元したカマドで煮炊き方法を見た後、いつもは調査補助員さんが使っているプレハブ休憩所で昼食をとりました。

午後はしばらく土器片の落ちている畑のなかの道を歩き、昭和40年代に発掘調査されたカブト塚古墳や経僧塚古墳を見学し、やや太陽の傾きかけた頃、成東町の真行寺廃寺に到着しました。周辺は植木畑、畑地や山林として保存されており、今でも布目模様の瓦の破片を見つけることができ、大きな建物の存在を想像することができました。

考古学を学ぶのは机上だけでなく、歩きながら自分の目と足で確かめることが大切です。実際の調査を見学し、周辺を歩いてみることで、古墳の見分け方や集落の立地条件などを考え、当時の人たちがどのように生活していたか分かったと思います。(高田)



胡摩手台16号墳の横穴式石室



久保谷遺跡の竪穴住居跡に復元したカマド



秋のお花畑のなか真行寺廃寺へ



真行寺廃寺金堂跡にて

発掘調査速報

木更津市久野遺跡



木更津市草敷、高倉観音の東1kmにある久野遺跡の発掘調査が10月から始まりました。この遺跡は、矢那川の水源に近い標高100mの台地の上であって、マリスタジアム約3.5個分の広さです。

調査を始めて間もなく、奈良時代の瓦が出てきました。この地に瓦葺きの建物が建っ



いたのでしょうか。その時代、瓦を葺くことができる構造の建物といえば、役所やお寺ときわめて限られた施設しかなかったと考えられます。当時、この場所は人里離れた山深い土地だったと思われることから、お寺があったのかもしれませんが。発掘調査は、この後も続きます。(神野)

美女たちのムラ?

流山市にある上新宿貝塚は、縄文時代後・晩期の馬蹄形貝塚です。これまでの調査でも、貴重なものが数多く見つっていますが、なかでも装飾品の多さには目を引かれます。動物の骨を加工したヘアピンやサメの歯のペンダント・立体的な装飾のつけられた耳飾り・貝の腕輪などからは、当時の人たちのおしゃれに対する意識の高さが伝わってきます。写真は今回の調査で見つかったペンダント(上段)と骨でできたヘアピンです。ペンダントの黒いほうはサメの歯に穴をあけたもの。左端のヘアピンには朱が塗られています。

さまざまなアクセサリーの出土する上新宿貝塚ですが、狩猟の道具である石鏃などは少ししか見つかっていません。貝塚に残された

たくさんの獣骨や魚骨は、どうやってとられたものなのでしょう?(岡田)



埋蔵文化財アラカルト

シリーズ 住まいの移り変わり

第6回 中世

中世(鎌倉時代から戦国時代)に入ると、奈良・平安時代に登場してきた掘立柱建物が庶民の住居として一般化してきました。また、それまでは寺や神社に使われてきた礎石建物(表面が平らな石に柱をのせて建てる建物)も一部ですが使われ始めました。

庶民の住居は、壁は板で造られ、土壁はまだなかったようです。屋根はカヤや木の皮でおおったもので、瓦は寺に限られていたようです。また住居の中は、土間と板の間からなり、畳はまだ普及していませんでした。住居の広さは今でいう1DKくらいで、そこで一

家族が生活していました。でも、今と違って電気製品もなければ、タンスなどの家具もほとんど持っていなかったでしょうから、一家族が寝起きするには充分の広さだったかも知れません。

室町時代から戦国時代に入ると、近畿地方を中心とした西日本では、城下町や港町といった当時の都会に住む庶民の家も礎石建物が多くなってきましたが、関東や東北地方の東日本では依然として掘立柱建物が大部分でした。西日本と東日本の文化の違いの一端が住居をみても現れています。

関東では農家が礎石建物となるのは、江戸時代でも半ば以降のようです。(柴田)

まちがいさがし



(絵 福田)

前号の解答



左上のお城がまちがいでした。

このようなタイプのお城は、戦国時代末から江戸時代に造られたものです。(横山)

Q & A

1. 勾玉や管玉は、どのようにして穴を開けるのですか?

勾玉や管玉などの玉類は、石製・土製・ガラス製などがあり、中でも石製の玉類は数多く作られています。石材は、メノウ・水晶・ヒスイ・硬玉・緑色凝灰岩などが利用され、荒削り形削り側面調整穿孔(穴あけ)研磨の各工程を経て製作されます。穴あけは、ある程度形が整えられた石材の両側や片側か

ら錐状の工具を回転させて開けます。古墳時代には、鉄製錐が使用されま



ましたが、それ以前のことはよく分かっていません。ヒスイでは竹管を使って穴が開くことが実験で分かっています。また穴あけの際、金剛砂などの研磨剤を利用したようですが、まだ不明な点が多いようです。(伊藤)

収蔵遺物コーナー

土器の底の不思議な渦巻き文様

これは「深鉢」と呼ばれる煮炊き用の縄文土器の底部、今でいうと鍋の底の部分を下から見たところです。外房線の鎌取駅の近くにある千葉市有吉北貝塚で、約4,500年前の縄文時代中ごろの層から出土しました。8年前に掘り出されたものですが、昨年になって底に文様があることに気づきました。この土器には謎が二つあります。一つは「なぜ見えにくい底の部分に文様を描いたか」で、もう一つは「複雑な渦巻き文様のルーツ」です。

土器を観察してみると、焼きあげる前に器の表面を磨いて土器がほぼできあがってから、先のとがった道具で文様を描いた様子が見えます。また、底の面には灰がついているので、炉のなかに立てて調理に使われていたこともわかります。ですから、お祭りなどのための特別な土器ではなく、底を見なければごくふつうの土器であったはずで

ところで、当時の土器の文様やかたちを見ると、一定の決まりがあったようで、自分勝手な文様をつけることはできませんでした。

これは想像ですが、作り手（おそらく女性でしょう）は、毎日のように使う一番身近な土器に、しかも、わざと人に気づかれにくい



底の部分を選んで文様をつけたのでしょうか。遠くの村から嫁いできた女性が、禁じられたふるさとのデザインをそっと土器の底に刻んだのかもしれませんが。

渦巻きのデザインのルーツについては、候補地である東北や北関東地区の土器を調べてみようと思っています。この土器を作った女性の出身地をたずねる気持ちです。みなさんも、一片の土器片に刻まれた数千年前の物語を想像してみませんか。（西野）

おしらせ

創立20周年記念事業

出土遺物展

期日：平成7年1月14日(土)～2月19日(日)

<月曜日は休館>

場所：千葉県立房総風土記の丘

編集後記

あけましておめでとうございます。創刊してから今年で4年目に入り、おかげさまで愛読者が増え、軌道に乗ってまいりました。今後も、埋蔵文化財が身近なものとして御理解いただけるように、努力するつもりです。（横山）